錯視の世界

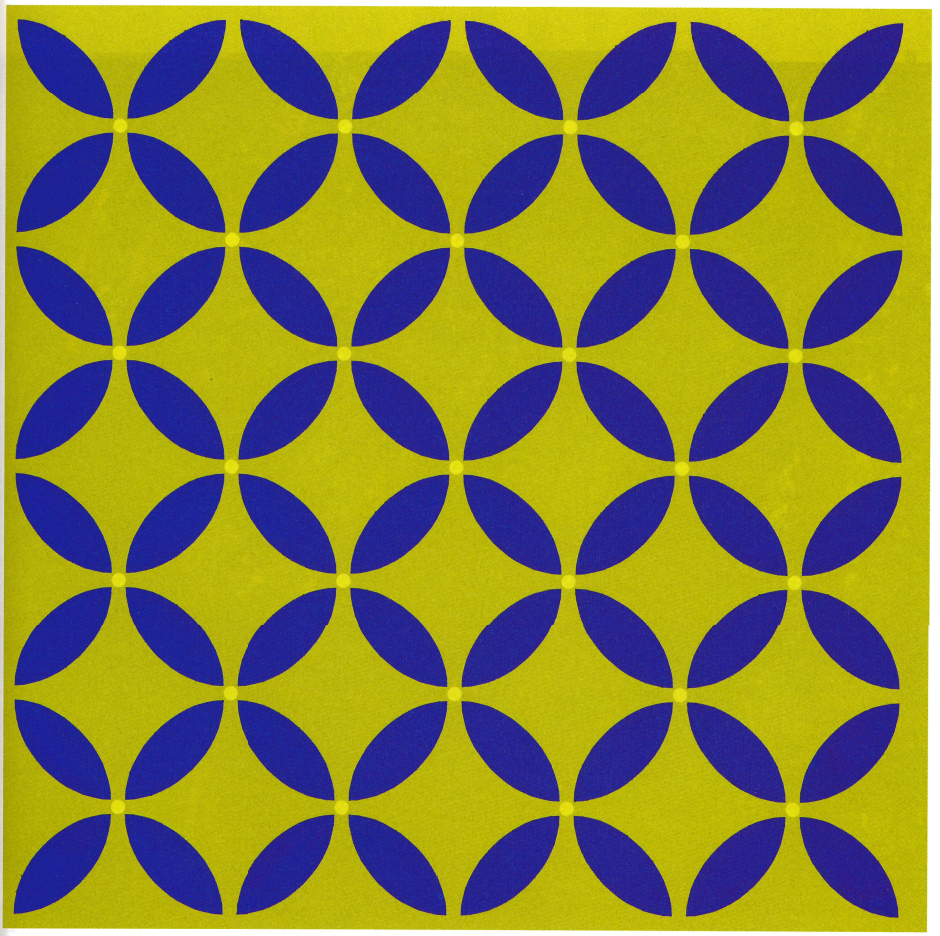
北岡明佳
[立命館大学助教授]

「あさがお」

凸レンズのような青色の形の先に黄色い点が描かれています。注意深く観察しますと、見つめている場所から離れたところの黄色い点は消えるように見えます。このような錯視を消える錯視といい、フランスの研究者が二〇〇〇年に専門誌上で初めて発表しました。その論文に載せられている図と「あさがお」は見かけはかなり異なるのですが、私は基本的には同じ錯視だと考えています。

一方、消える錯視ではありませんが、フィリング・イン(日本語に訳すなら「充填」)という現象が知られています。フィリング・インの例として、盲点の知覚があります。盲点ではものが見えませんが、だからと言ってその部分だけ黒く見えるわけではなく、その周囲と同じ明るさや色に見えます。これは、見えないはずの部分に周囲の知覚が「充填」されるからです。消える錯視は見えるはずの部分が消えてしまうだけでなく、その消えた部分がまわりの知覚に「充填」されてしまうわけですから、フィリング・インのプロセスを含んでいると言えます。フィリング・インは大脳の視覚一次野の働きと考える研究者が多いので、消える錯視の神経生理学的研究はそのあたりから着手ということになるでしょう。

なお、この作品の円を重ねたような模様は、七宝繋ぎという名の日本古来の文様です。



©北岡明佳2003

きたおか・あきよし
一九六一年、高知県生まれ。筑波大学大学院心理学研究科修了。教育学博士。二〇〇一年より現職に。錯視を使ったデザインという新ジャンルの構築・研究を重ねる。著書に史上初の錯視デザインの本『トリック・アイズ』(一、二巻。カンゼン刊)がある。